

「近世の琉球王国」について

増山雄三

かつて沖縄県は「琉球王国」と呼ばれ、独自の文化を形成してきたが、十四世紀頃の琉球王国は、北山・中山・南山という三つの小国に分れ、島を巡る抗争を繰り返していた。そのうち、最も優力な勢力は、現在の浦添市に拠点を置く中山で、舜天、高祖、察度の三家が栄え、後の察度王時代には、高麗瓦葺きの正殿を中心に、石積み城壁で囲まれた大規模な城になり、周辺には、王陵や寺院のほか、屋敷に大きな池や集落などもあった。またその頃から、中国との朝貢貿易を始め、海外交易の扉も開き、当時、琉球王国初期の王都だった浦添は、後に大交易時代を迎え、東南アジアの中継貿易拠点として繁栄した、琉球王国の礎を築いた都といえる。

それで、今でも浦添市には、中山の王城で

あった「浦添グスク」や、初期琉球国中山の王陵である「浦添ようどれ」もあると共に、首里城と浦添グスクを繋いでいる、石畳でできた古道など、多くの史跡が残っているが、十五世紀になって、王都を首里に遷都し、貿易拠点も那覇に移し、王国の基礎を固めた。それが、一六〇九年に薩摩藩に進攻され、その支配下に入った琉球王国は、朝貢貿易の輸出品調達などで、薩摩への依存を深めながらも、一定の政治的主体性を発揮し、中国を宗主国とする冊封朝貢関係を維持し、幕藩体制に吸収されない、異国として存在した。一方、十七世紀後半～十八世紀前半には、王府の儀礼はじめ社会全体の中国化が進み、国王を中国皇帝になぞえる王権も強化され、十九世紀半ばには、欧米諸国と結んだ修好条約は、琉球独立の可能性も含んでいた。しかし王朝は、そんな事について自覚しないまま、「日中両属」の現状維持を望んだので、両属を否定する、日本側の明治政府に、

結果的には対抗する事ができなかつた。それで、一八七九年には、明治政府によって「琉球処分」を受けたが、それまでの近世琉球は、中国を宗主国とする冊封関係を維持しながら、幕府将軍や国主の代替りごとに、幕府への臣従を示すための、慶賀使や謝恩使を、江戸へ派遣したのである。さらに、薩摩への年貢納入も強いられ、中国との朝貢貿易や王府人事にも干渉され、歴代国王は、薩摩への従属を誓う起請文を、提出し続けさせられたのである。それで、沖縄学の父と言われている伊波普猷は、沖縄を朝貢貿易の利益を全て吐き出す「長良川の鵜」と評して、かつての近世琉球は、薩摩の傀儡国家とみなされたが、今は、中国と幕府を相手に、したたかに立ち回った事が、明らかになってきている。薩摩は一七二二年、年貢増収を目的に、首里王府に対し土地調査を求めたが、それは、一八三五年には九万九千石とされた、琉球の

土地生産高は、その後の開墾でつ耕地面積が大幅に拡大していたので、検地をすれば、年貢の大幅増に繋がると考えたからだ。

琉球史が専門の、豊見山琉球大教授によれば、この時の交渉で王府は、台風などの自然災害による、農村の疲弊に加えて、中国皇帝からの冊封使渡来に伴う、経費負担が重くなっている」と主張したので、検地は行われず、石高を約4%増にして薩摩と合意した

それで当時。王府の高官だった蔡温は「琉球には中国や幕府との友好関係があるから、これを維持できなくなるような負担を、薩摩が要求する事はない」と、王府に具申しており、薩摩の弱みを承知していた。

それで豊見山教授は、「薩摩の政治的圧力に対し、王府は外交カードを持ち出し、譲歩を引き出した。それは、勝つ事はできなくても、負けない外交戦略を持っていたのではなからうか」と評価している。

朝貢貿易の実態についても、薩摩と王府や

琉球役人などが、それぞれ出資していたこと
や、さらに、それが常に黒字とは限らなかつ
た事とともに、王府が朝貢関係についての維
持を、中国に対し積極的に働きかけていた、
という事も明らかにされている。
また、朝貢国として、中国側から「琉球国
中山王」として、その地位を保障されている
限り、琉球は、幕藩国家には完全に吸収され
ないという、異国であり続ける事ができた。
それで、異国としてのアイデンティティー
を確立するため、十七世紀後半以降は、王府
の主導で、社会や文化の中国化が進み、士族
社会から村落まで、儒教イデオロギーや、風
水思想が取り入れられた。
そんな事から、父系の血縁集団である門中
や、祖先供養の清明祭などは、現代の沖縄に
も受け継がれていて、それと同時に、王府儀
礼などを通じて王権も強化された。
歴代国王の肖像画に画かれた、冠の玉石の
列は当初七条で、明の冠服制度では、皇帝の

孫にあたるランクだったが、十八世紀半ばには、十二条の皇帝ランクに変わり、清に代った中国を宗主国としつつ、流経国内では、王を皇帝になぞらえていた事がうかがえる。

一八五〇年代になって、琉球が米仏蘭との間で、修好条約を結んだ事は、これらの国から独立国と認められた事を意味したが、その後の琉球処分に至る、明治政府との交渉で、王府はそれをもとに独立は主張しなかったのは、王国体制の維持にこだわり、自らを、変革させる事ができなかつたからである。

ところで、琉球王国といえば耕地に乏しい国だが、それゆえ、海外との交易に頼らざるをえなかつた、というイメージが強かつたものの、近世琉球は農業を土台として、社会が成り立っていたという。

というのは、琉球王府が作成した土地台帳によれば、沖縄島の耕地面積は、河川の改修による治水が進んだ結果、十七世紀の八千八百五十ヘクタールから、十八世紀半ばには一

